

連載コラム



みずき野と
その周辺の
植物と昆虫

第 72 回

キク科植物の花 (3)

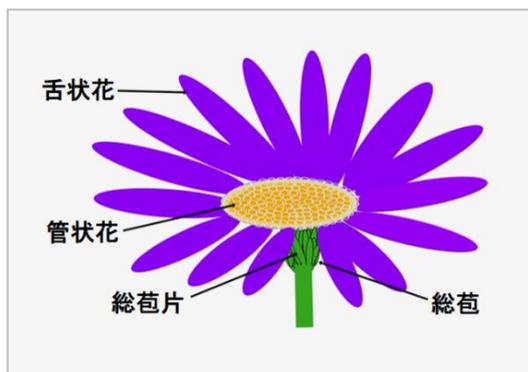
～ キク科キク^あカ^か亜科の植物 ② ～



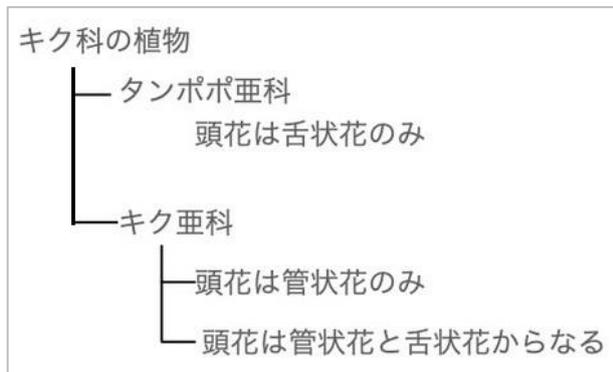
もとよし ふさお
本吉 総男

2023 年 9 月

第 71 回「キク科植物の花(2)—キク科キク亜科の植物①」の続きで、頭花に管状花のみをもつ花（見出し「7」から「11」）の他、舌状花と管状花の両方をもつ植物の一部（見出し「11」と「12」）を紹介します。これまで使っていたキク科の頭花の模式図とキク科分類図を再度載せます。管状花は筒状花ともいいます。



キク科植物の花(頭花)の基本構造



キク科植物の分類

7 ダンドボロギク（タケダグサ属）と ベニバナボロギク（ベニバナボロギク属）

ダンドボロギクとベニバナボロギクはいずれも外国から日本に侵入した帰化植物で、頭花は舌状花をもたず、管状花だけで構成されています。「ボロ」とは花が終わった後に生じる綿毛を「ぼろ」に例えたものです。

ダンドボロギクは北アメリカ原産の一年草で、1933年に愛知県の段戸山で発見されたのでその名がつけました。ダンドボロギクはよく群生しています。しかし翌年、同じ場所を訪れても、姿を消していることが常のようです。ダンドボロギクがわが庭に数本生えたことがあり、抜かないでおきましたが、翌年はまったく生えませんでした。北アメリカでは山火事の焼け跡によく群生するそうです。

ベニバナボロギクはアフリカ原産の一年草で、日本には第二次大戦後に発見されました。ベニバナボロギクの頭花も舌状花がなく、



ダンドボロギク 9月下旬 取手市貝塚地区

かんじょうか
管状花で構成されており、ダンドボロギク同様に管状花の束は上部近くまでしっかりと総苞
かんじょうか
そうほう
に包まれたまま咲きます。みずき野周辺ではダンドボロギクほど多くは見かけませんでした。



ベニバナボロギクの花(左)と
咲き終わった後の綿毛(右)
11月上旬 守谷市本町地区

8 ハハコグサ、チチコグサ、チチコグサモドキ（ハハコグサ属）

ハハコグサは道ばたや野原にごく普通に見られる越年草で、日本全土や温帯、亜熱帯、熱帯アジアに広く分布する植物です。頭花は4~6月ごろ見られ、舌状花はなく、頭花の外側には雌花が、内側には両性花があり、実は綿毛をつけます。^{ぜつじょうか}

ハハコグサの名は平安時代に名付けられたそうです。御形（ゴギョウまたはオギョウ）とも呼ばれ、春の七草のひとつとして知られています。また、昔は草餅の材料とされましたが、今はもっぱらヨモギが使われます。

ハハコグサによく似た花をつける植物にアキノハハコグサがあります。ハハコグサは高くとも30センチほどで、茎の根元近くで枝分かれます。一方、アキノハハコグサは60センチ



ハハコグサ 5月中旬 みずき野中央広場

ほどになり、茎の中頃かそれより上部で枝分かれますなどの違いがあります。残念ながら、みずき野周辺ではアキノハハコグサは見たことがありません。

チチコグサは道ばたにごく普通に見られる多年草で、日本全土や東アジアの温帯から亜熱帯に分布しています。一般にハハコグサより小さく、高さは10~25センチほどで、葉は表面が濃い緑色、裏面には綿毛が生えて白く見えます。茎は分岐せず、4~6月頃茎の頂端に薄

い褐色の頭花が密集してつきます。ハハコグサと同様、頭花の外側は雄花で、内側に両性花があり、実は綿毛^みをつけます。チチコグサの名は、ハハコグサと対照的につけられたものです。



チチコグサ 4月中旬 わが家の庭



綿毛をつけたチチコグサ 5月中旬 わが家の庭

チチコグサモドキは北アメリカ原産の越年草または一年草の小さな植物で、大正末期ごろ日本に侵入したようです。高さはチチコグサと同じ位で、道ばたにごく普通に見られます。葉は淡緑～緑色で、5～7月頃花が見られ、頭花は淡褐色です。

ウスベニチチコグサは北アメリカ原産の越年草で、植物全体はチチコグサモドキに似ています。5～7月頃花が見られ、頭花は紅色です。図鑑などには、葉の幅が狭く、葉は比較的濃い緑色のものが載っていますが、右下の写真のものは、葉の幅が広く、薄い緑色なので、はたしてウスベニチチコグサかどうかわかりません。しかしウスベニチチコグサについてのサイトには、ここに載せた写真と似た写真が多くあり、ウスベニチチコグサと推測しています。まだ研究の余地の多い植物と思われます。

チチコグサに似た植物は他にも数種ありますが、識別はかなり難しいです。



チチコグサモドキ 5月下旬 わが家の庭

ウスベニチチコグサ(推定)
5月下旬 わが家の庭

9 ヤグルマギク (ヤグルマギク属)



ヤグルマギク 5月上旬 みずき野7丁目

ヤグルマギクはアザミとは属は異なりますが、アザミに近い植物です。地中海沿岸から西アジアに原産する越年草で、明治年間に園芸植物として輸入されたそうですが、現在は帰化植物として道ばたなどに自生しています。春から夏にかけて主として紫色の頭花がつきますが、白い品種もあります。頭花の中の花は一見^{ぜつじょうか}舌状花に見えますが、^{ぜつじょうか}舌状花はもたず、すべて^{かんじょうか}管状花です。

ヤグルマギクは地中海沿岸地方では愛でられた植物であったようで、1925年、イギリスの考古学者カーターによって、3300年を経たのちにエジプトのツタンカーメン王のミイラとともに、棺の中に灰色化したヤグルマギクが発見されたそうです。また装飾にもよく使われ、有名なボッティチェリの絵画、「春(プリマヴェーラ)」に描かれたフローラの衣装に比較的大きくあしらわれている植物はヤグルマギクの様です(週刊朝日百科「世界の植物」6号)。



ボッティチェリ 春(プリマヴェーラ)

Wikimedia よりダウンロード



春(プリマヴェーラ)の中の
女神フローラ

なお、ヤグルマギクは以前ヤグルマソウと呼ばれることが多かったのですが、ユキノシタ科のヤグルマソウと区別するため、ヤグルマギクが標準和名になりました。

10 ノボロギク（キオン属）

ノボロギクはヨーロッパ原産の越年草で、繁殖力は極めて強く、現在はほとんど世界中で見られる植物です。日本には明治の初め頃侵入したそうですが、道ばたや畑などに極めて普通に見られ、ほとんど1年を通じて花を咲かせます。



ノボロギク 2月上旬 みずき野7丁目

キオン属の植物の頭花は通常、舌状花と管状花をもっていますが、ノボロギクは例外で、管状花のみで構成されています。

キオン属の学名はセネシオ (Senecio) といい、セネシオについては余談として後述します。

11 コセンダングサ、コシロノセンダングサなど（センダングサ属）

コセンダングサは北米原産の一年草で江戸時代に渡来したそうです。畑地、野原、農道などによく見られます。頭花には舌状花がなく、管状花は両性花です。

コシロノセンダングサは白い舌状花をもっていますが、それ以外の部分はコセンダングサとまったく同じです。おそらくコシロノセンダングサの方が祖先で、舌状花が退化してコセンダングサになったと思われます。



コセンダングサ

5月中旬 みずき野8丁目東隣接地



コシロノセンダングサ

11月中旬 みずき野8丁目東隣接地

センダングサ属の植物の中では、北米原産のアメリカセンダングサもよく見かけますが、頭花をはっきり示す写真を撮っていませんでした。最盛期を過ぎた頭花の写真ですが載せておきます。^{そうほう}総苞は頭花の下に広がっており、頭花の直径より長いので、他のセンダングサ科の植物と区別できます。



アメリカセンダングサ
10月下旬 守谷市本町地区

在来種センダングサもみずき野周辺で見かける植物ですが、写真を撮っていませんでした。頭花は黄色い舌状花^{ぜつじょうか}を持っているので、他のセンダングサ属植物と区別できます。

12 ハルジオン、ヒメジョオンなど（ムカシヨモギ属）

ハルジオンとヒメジョオンについては[第 15 回「帰化植物たち」](#)に載せていますが、ムカシヨモギ属の仲間としての再登場です。

みずき野周辺で見られるムカシヨモギ属の植物はいずれも外国からの帰化植物で、その多くは日本の環境に順応して旺盛に繁茂しています。

ハルジオンは北米原産の帰化植物で、越年草といわれますが、多年草として生き残る場合もあるようです。花は春～初夏にかけて咲きます。ハルジオンによく似たヒメジョオンも北米原産の帰化植物で越年草または一年草で、初夏～秋まで花を咲かせます。このように花の咲く時期は両種^{りょうしゅ}の間にずれがありますが、初夏には両種^{りょうしゅ}の花が見られます。両種はよく似ていると



ハルジオン 5月中旬 守谷市本町地区



ヒメジョオン 6月上旬 守谷市本町地区

はいえ識別は簡単で、ハルジオンは茎が中空であり、ヒメジョオンは茎がつまっていることや、葉の形の違いによって区別できます。また、頭花の舌状花はハルジオンの方がヒメジョオンより細く、数も多いことから両種の識別は容易です。

ペラペラヨメナは中央アメリカの原産の多年草で、花はハルジオンやヒメジョオンに似ています。日本では園芸種として利用されていますが、野生化したものもあり、新しい帰化植物になりかけているようです。園芸上はペラペラヨメナという標準和名を使わず、エリゲロンと呼ばれていますが、エリゲロンはムカシヨモギ属の学名 *Erigeron* を利用した名称です。



ペラペラヨメナ 5月下旬 わが家の庭

ヒメムカシヨモギ(北アメリカ原産の越年草)とオオアレチノギク(ブラジル原産の越年草)はみずき野周辺に数多く見られます。どちらも8~10月頃に花を咲かせます。両植物はたいへんよく似ていますが、ヒメムカシヨモギの頭花では小さな舌状花が総苞の上に見られ、オオアレチノギクでは舌状花はさらに小さく、総苞の外にはほとんど出ていません。



ヒメムカシヨモギ 8月上旬 守谷市本町地区



オオアレチノギク 8月上旬 守谷市本町地区

なお、オオアレチノギクは以前イズハハコ属の植物とされていましたが、現在はヒメムカシヨモギ属に移されています。

13 セイタカアワダチソウ（アキノキリンソウ属）



セイタカアワダチソウ
11月中旬 取手市貝塚地区

セイタカアワダチソウは北アメリカ原産の多年草です。10～11月頃、長い房に沿って小さな黄色い頭花を多数つけます。それぞれの頭花はぜつじょうか 舌状花とかんじょうか 管状花をもっています。

どのような経路で日本に侵入したかははっきりしませんが、第二次大戦後空き地や野原にセイタカアワダチソウばかりの大群落をつくり、日本の秋の風景を変えてしまったほどでした。その頃と比べると現在は他の植物と共存するようになりました。

アキノキリンソウ属の代表種であるアキノキリンソウも、守谷市城址公園の付近で見ましたが、写真を撮っていませんでした。

余談： セネシオのこと

本編「10 ノボロギク」に載せたノボロギクはキオン属の植物です。キオン属の学名はセネシオ (Senecio セネキオとも) といいます。セネシオについて、私には気になる絵画があります。パウル・クレールが1922年に画いた「セネシオ」と題する絵画(スイスのバーゼル市立美術館所属)です。

この絵に最初に興味を持ったのは、昭和34年(1959)にみすず書房から発刊された画集『現代美術 7 クレー』に載った「さわぎく SENEICIO」でした。詩人で、ドイツ・フランス文学者の片山敏彦氏がこの絵に添えたテキストは、なかなかの名文でしたのでここに引用しておきます。



パウル・クレール画 セネシオ
Wikimedia よりダウンロード

片山敏彦 文

「さわぎく SENECIO」1922、41×38cm、油彩

原作はスイス・バーゼルの美術館にある。この時期には人物画が多いが、その中でも特にこの絵は明るい調和に充ちて、ベートーヴェンの『第 8 交響曲』の美しさを思わせる。白、黄、ばら色、橙々色、赤は春のいのちのハーモニーを作り、僅かな青は空の色の反射のようだ。

さわぎくの花のヴィジョンがクレアの心の中でこんな無邪気な少女の顔に変形(メタモルフォーゼ)したのか？ それとも SENECIO セネシオというラテン的な花の名は、この少女の名なのか。

私がこの絵と片山氏の文章に感銘したのは確かですが、少し気にかかるところがありました。なぜ SENECIO を「さわぎく」としたのか。サワギクは舌状花も管状花も黄色い、北海道、本州、四国、九州に分布する日本固有種で、ヨーロッパにはありません。そこで片山敏彦氏が SENECIO を「さわぎく」とした理由を推測してみました。

サワギクは学名を以前 *Senecio nikoensis* (現在は *Nemosenecio nikoensis* と変名された) と呼ばれ、日本ではサワギクが *Senecio* の代表種とされていたと思われます。それゆえ、片山敏彦氏は *Senecio* を翻訳した形で「さわぎく」としたのではないのでしょうか。

残念ながら、私はサワギクの写真をもっていないので、画像をインターネットで検索してみてください。日本でもヨーロッパでもみられる *Senecio* は、上述のノボロギクのほかにキオンおよび園芸植物のシロタエギクです。



参考写真 キオン
8月下旬 日光華厳の滝付近



シロタエギク
6月中旬 店舗「みずき野ひろば」前の花壇

これら3種以外に、ヨーロッパではどのような種の *Senecio* が見られるのか、手元にある Oleg Polunin 著 “Flowers of Europe - A FIELD GUID” (Oxford University Press 1969)によって調べたところ、日本でも見られる3種(ノボロギク、キオン、シロタエギク)の他に12種が載っていました。しかしノボロギク(舌状花をもたない)以外は舌状花が黄色で管状花が黄色ないし黄褐色のものがほとんどで、クレーの絵のような多彩な色調のものは見られませんでした。ただ、どの花も明るさを感じさせます。多分クレーは明るくて可愛らしい *Senecio* のいずれかが好きで、少女の肖像に *SENECIO* という響きのいい名を与えたのではないかと想像しています。

Senecio という属名は、本来は *senex* (老人) というラテン語に由来するもので、*Senecio* の実の綿毛が老人の白髪や白髭を連想させるからだと思いたしますが、クレーの絵に関しては、この本来の意味は無視いたします。